

あいだのすみっこ不定期漫遊連載 第145回 最終回

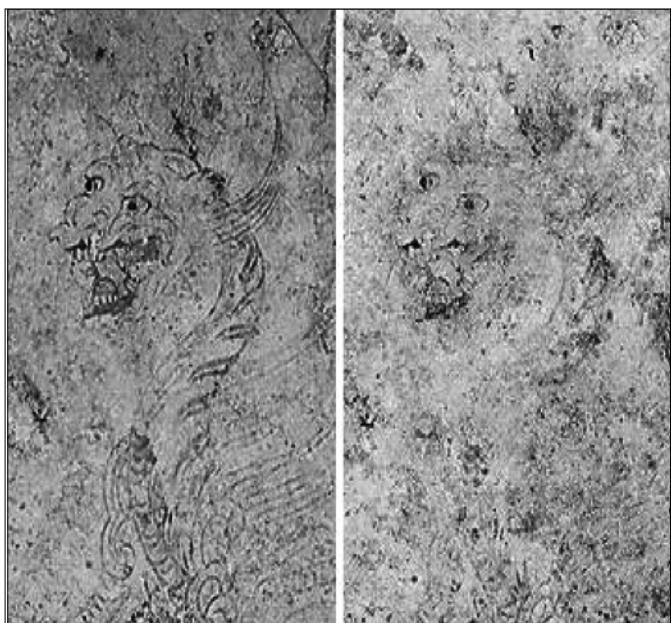
待っているうちに来てしまった寅年のために

稲賀 繁美

(いなが しげみ/京都精華大学教授・国際日本文化研究センター、
総合研究大学院大学名誉教授・放送大学客員教授)

古墳彩色壁画にみえる「寅」と「白虎」
干支に寅年といいながら、日本列島には虎は生育していない。今日「美術」と括られる枠組みから、遺品を探すとなると、まずは古墳内壁の壁画に描かれた「白虎」となろうか■1。高松塚古墳からは、1973年、東西南北に配置された四神の像が発見されたが、青龍（東）、朱雀（南）、白虎（西）、玄武（北）は、また春夏秋冬にも対応する。発掘当初、巧みな線描や彩色が確認された玄室の壁画

は、1974年には国宝に指定された。だがその後、2002年に黴が大規模に発生し、著しい褪色が確認された。なお、南の朱雀は、発掘当初からすでに過去の盗掘のため、失われていた。彩色壁画での四神としては、高句麗の江西大墓に著名な壁画があり、1913年以來の「朝鮮古蹟調査」で、関野貞率いる調査隊の残した模写も著名だろう。だが、高松塚の図像とは、様式のうえで直接の縁戚関係は認めがたいという。



■1 高松塚古墳、1972年と2002年に撮影された白虎



■2 キトラ古墳、十二支の「寅」(左)と四神の「白虎」(右上)とその復元図(右下)



高松塚は7世紀末から8世紀初期の藤原京時代の古墳とされているが、それとも近い関係にあるとされる明日香村のキトラ古墳では、1983年の調査でまず石室内に「玄武」が見いだされ、話題を呼んだが、1998年には、さらに「青龍」と「白虎」■2の存在が確認され、また十二支も壁面に痕跡があり、6体までが数えられている。さらにここでは、朱雀を欠く高松塚とは違って、四神もすべて揃っている。とはいえ「白虎」は、ろくろ首のように長い首を擡げ、口の後ろからは長い髭が頭上に聳え立ち、肩口からは、翼を伸ばしている。体毛の縞模様がなければ、予備知識なく、これを虎に起源をもつ図像と読み取ることは、容易ではあるまい。これらの壁画群は、2019年には一括して国宝の指定を受けた。

「捨身飼虎」

仏教が日本に伝来すると、新たな展開が見られる。著名なのが、法隆寺に伝わる玉虫厨子に描かれた「捨身飼虎」の図像だろう■3。周知のように、インド起源の元来の仏教説話は、中国内陸部の砂漠地帯、敦煌は莫高窟の壁画に描かれた例が、今に残る。釈迦の前世を語る本生譚、すなわち「ジャータカ」のひとつであり、飢えた幼い虎の子の命を救うために、衣服を脱いで、崖のうえから身投げする薩埵王子の姿が、須弥山の腰板の側面に、密陀絵と推定される技法で描かれている。脱衣の場面、落下する姿、地面に落ちて餌食となる死体と、三つの異なる位相がひとつの画面に描かれた、いわゆる「異時同図法」の作品として知られる。

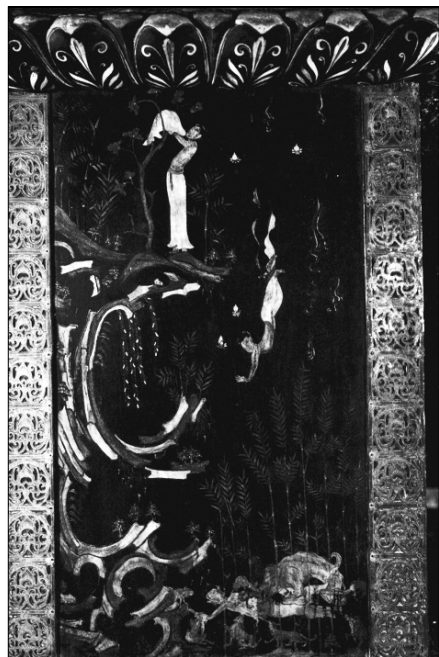
山折哲雄さんが、この説話の日本における変容については「研究ノート」を

同じ経典には月のうさぎも登場するが

『日本研究』(1996年・15号)に掲載している。それによれば、『金光明經』の「捨身品」に由来するこの物語は、どうも日本列島では敬遠され、その後しだいに忌避されるようになった、という。ちなみに同じ場面には月の兎も描かれているが、こちらは、差し上げるものがないので我が身を食べてください、と火中に投身自殺を遂げた兎の徳を尊しとして帝釈天が、その兎を月に蘇生させた、という逸話。だが、こうした自己犠牲による血腥い肉食の連想は、どうも日本では好まれない。山折論文はここから、朝鮮の僧侶、元暁(616-686)が山中で瞑想にふけるのを、周囲で三頭の虎が見守っている光景へと話を継ぎ、この『華嚴祖師絵伝』を明恵(1173-1232)の《樹上座禅像》へと結びつけるのだが、これは今、措こう。

真達羅大将

仏像にも一言ふれておくならば、『真達羅大将』を含む興福寺の「十二神将像」中十一体は国宝に指定されている■4。像高117cmの寄木造り、鎌倉時代の造作で、西暦では1207年の作と判明しており、東金堂に安置されていた。その甲冑姿の人物造形からでは、とても「虎」にはみえないが、その兜の部分に、「虎」というか、すくなくとも猫族の顔つきをした小動物が飾(あしら)ってある。薬師如来の眷属・侍者とされる神格が、中国で十二支と習合したものとされている。なお、『仏教図彙』では「真達羅大将」に「寅」を割り当てるが、そうでない場合も少なくない。例えば新薬師寺の塑像の十二神将が、奈良時代に遡る、現存する最古の遺品として著名だが、こちらの真達羅大将の頭部には、虎の姿は確認できない。



■ 3 玉虫厨子 捨身銅虎図 法隆寺





■ 4 《十二神将像 真達羅大将》 国宝—新薬師寺

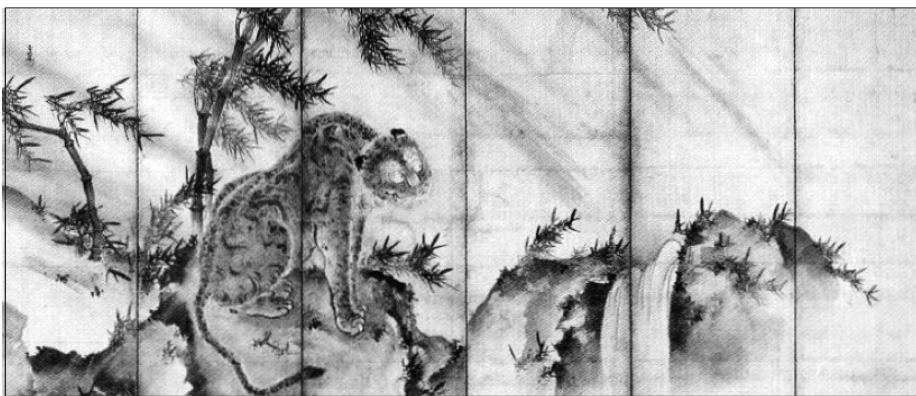
(左) 国宝 興福寺 1207年 (右) 国宝 新薬師寺 奈良時代

水墨と障壁画の龍虎

水墨画に目を移すと、どうだろうか。

雪村周継 (1492?–ca.1589) は常陸に生まれたが、《龍虎図屏風》■5は1550年代の作と推定され、小田原で活躍した時期の遺品、現在では、北米のクリーヴランド美術館蔵。もともと龍虎図にあっても、龍は青龍に起源を持ち、雨を呼び春の生命

を象徴するのに対し、虎は白虎として秋、風を呼ぶ存在であり、生命の終焉を暗示する、という。「龍吟ずれば雲起こり、虎嘯（うそぶ）けば風生ず」——それが、禅画の画意とされるが、その変奏が風神・雷神の対ともなろうか。剽軽な表情の虎の姿に、雪村最盛期の真骨頂を見る向きも多いようだ。同じ（伝）雪村の《竹虎



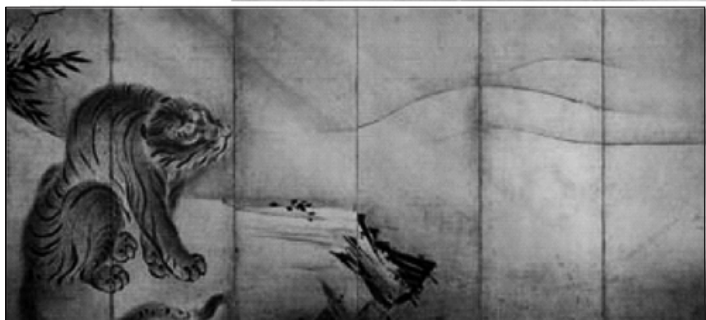
■ 5 雪村周継 《龍虎図屏風》(左隻) 室町時代 16世紀



■ 6 (上) 伝・雪村周継 《竹虎図》 東京藝術大学
(下) 橋本雅邦 《山水画冊・雪景図》(部分) メトロ
ポリタン美術館

図》は、「これが実にいいんだ」などといつて狩野芳崖 (1828-1888) が賛嘆し、来客にその場での即興の筆さばきで、その姿を巧みに再現してみせた、といった伝聞の逸話でも有名だろう。その甲斐あって東京美術学校に購入された本作には、橋本雅邦 (1835-1908) による模写もあり、ニューヨークのメトロポリタン美術館に収蔵されている■6。雅邦には皇室献上品の《龍虎》もあり、油彩に対抗した画風は切手の図柄ともなっている。

長谷川等伯 (1539-1610) には、年記のはっきりした、晩年の《竜虎図屏風》が現在ボストン美術館に所蔵されており■7、また重なる時期の狩野山楽 (1559-1635) にも、妙心寺に伝わる《龍虎図屏風》が著名だろう■8。このあたり、定番の作品の羅列となりかねない。等伯の水墨による淡



■ 7 長谷川等伯 《竜虎図屏風》1606 ボストン美術館



■8 狩野山楽《龍虎図屏風》(左隻) 京都・妙心寺 重要文化財



■9 俵屋宗雪 《龍虎図》(部分) 東京国立博物館

彩と、金地に原色の横溢する山楽とは、同時代における両者の対比を際立たせる。これも常識の復習だが、山楽の虎の左に豹の描かれているのは、当時、雌の虎と豹とが混同されていたことの証拠。かれらにやや遅れて、寛永年間から慶安年間に、前田家の御用絵師として活躍した俵屋宗雪(生没年不詳)にも、愛嬌のある水墨の虎が知られる■9。

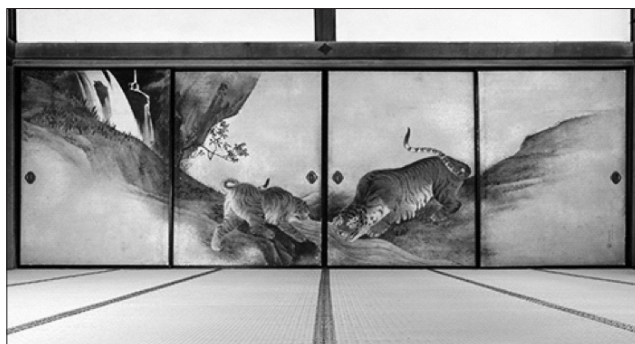
さらに下れば、円山応挙(1733-1795)に、讃岐の金比羅宮に描いた90面におよぶ障壁画のなかで、「虎の間」にも指を屈することができよう■10。応接の座敷の水平線が襖の奥へと拡がってゆくような錯覚の効果は、舶来眼鏡絵への応挙の通暁の賜物か。その応挙への敵愾心を隠さなかつ

たのが、長沢芦雪(1754-1799)の《虎図》(1786年以前、と推定)■11。串本の無量寺蔵の傑作だが、4枚の襖のうち、左端には虎の髭の先端しか描かれず、右端には長過ぎる巻いた尾と、たくましい左後ろ足だけが、覗いている。左から二枚目に虎の顔の大写しと、爪を剥き出しにした前足が画面を圧する。あたかも隣の広間から襖に格子を跨いで、こちらに虎が踏み出してくる迫力がある。だが、その裏側には魚を探ろうとする猫が描かれているとのことで、とすれば表側画面に横溢する虎も、実は猫の拡大版にほかなるまい。

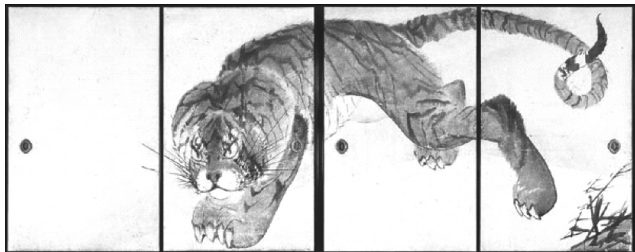
巨大なネコあるいは空想のトラ

総じて、多くの虎の姿には、画家たち同士の切磋琢磨や対抗心も伺われ、図像

■10 円山応挙「虎之間」遊虎図
天明7年（1787）55歳作 紙本墨画
金毘羅宮，表書院



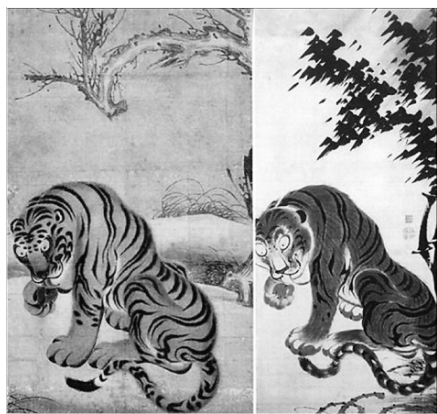
■11 長澤芦雪「虎図模」6面 江戸
時代・天明6年（1786）和歌山・串本
応挙芦雪館蔵 重要文化財



のみならず、虎の肢体や仕草もよく観察すると、相互の貸借関係も見えてくる。実物の虎を実見する機会を得なかった伊藤若冲（1716-1800）も、伝李公麟画の《虎図》（朝鮮時代16世紀後半・正伝寺所蔵）を丹念に写している■12。当時、韓半島には、実物の虎が棲息していたからである。《鳥獣花木図屏風》（江戸時代，出光美術館蔵）右隻右端にもモザイク模様の虎が佇む。

そうした事情ゆえ，日本の画家が描く

虎は，猫同様に，縦に切れ長の瞳孔を備えていたりする。実際の虎の眼球は，動物園で観察すれば一目瞭然だが，そんな猫の目とは，構造を異にする。江戸期の日本人画家には，真実に肉薄した虎を描きたいと，本物の毛皮や虎の腕の剥製，さらには牙や歯，頭骨まで入手して寸法を測定した，岸駒（1756-1839）のように研究熱心な絵師も現れる（富山市佐藤記念美術館に保存）。猫の拡大版ではダメだ，という解



■12 伝李公麟 《虎図》 朝鮮時代16世紀後半 正伝寺所蔵(左) 伊藤若冲 《竹虎図》 江戸時代18世紀末 鹿苑寺所蔵(右)

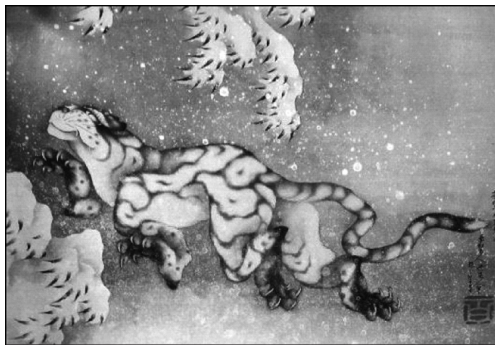
剖学流行の知的探究心である。にもかかわらず岸駒の虎は依然、「猫の目」仕様だった。

浮世絵・錦絵のトラ

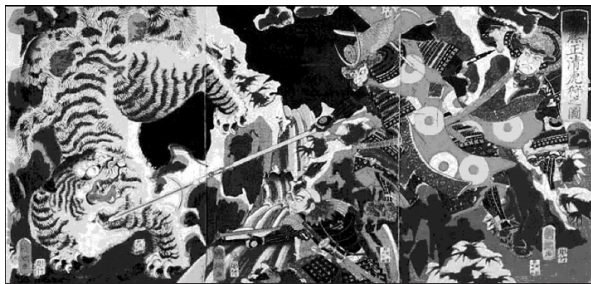
浮世絵・錦絵絵師からも、いくつかめ

ばしい作例を拾っておこう。北斎最晩年の雪中の虎は、洋風陰影法も葉籠中に取り入れて消化した画狂人(1760-1849)が、最後まで筆力に衰えを見せなかった証拠物件となる、肉筆の一品■13。歌川国綱

(生没年不詳：19世紀中葉に活躍)の《佐藤正清虎狩之図》は、秀吉の「朝鮮征伐」に画題を得た定番だが、歴史上の人物の実名は忌諱に触れるため、「加藤清正」が「佐藤正清」に化けている■14。月岡芳年(1832-1892)にも、同様に三枚続きの《正清猛虎討取図》が知られる■15。ちなみに清正の虎退治は、幾つかの地方で、今日なお伝統行事の祭礼に生き残っている。近代になると、これを逆手に取って、1910年の3.1独立宣言を起草した崔南善(1890-1957)が朝鮮/韓半島を勇猛な虎に見立てる擬獣(?)図像を考案し、「韓国併合」に伴う半島の日本帝国支配に、思想的に対抗した。



■13 葛飾北斎90歳の作。《雪中虎図》1849 個人蔵



■14 歌川国綱 《佐藤正清虎狩之図》



■15 月岡芳年《正清
猛虎討取図》

欧州博覧会往来と、近代画家たちのトラ競技

開港地にも、なぜかトラが頻出する。そしてトラは洋の東西を往還する。ヨコハマ錦絵をみると、落合芳幾（1833-1904）に《横浜阿蘭陀屋敷猛虎之図》（1861）ほか
が知られる■16。「神奈川横浜外国人の内
おらんだ二十五番の屋敷 この度古今に大

ひなル親猛虎を生取きたる 牛ノ大キサにて近々江戸おもてにおひて興行仕候 兎じきに犬三疋づゝくらふなりとぞ」との詞書が背景に読める。海外との繋がりといえば、長崎の画家、谷鵬（生没年不詳）に帰される一幅の《虎図》（18世紀）がプライス夫妻のコレクションに収まっている■17。



■16 落合芳幾 《横浜阿蘭陀屋敷猛虎之図》 1861



■17 谷鵬《虎図》プライス・コレクション

■18 橋本雅邦《龍虎図》
縦84.2cm×横141.2cm 1900年パ
リ万国博覧会出品、三の丸美術館



大橋翠石 (1865-1945) は、1900年のパリ万国博覧会に出品した《虎》で、日本人としてただひとり金牌を獲得した。この滞欧で改名した竹内栖鳳 (1864-1942) は、欧州での動物園での写生に基づき、帰国早々に金屏風で《獅子図》とともに《虎図》の屏風を仕立てる (1901年)。ここにはパリ美術学校教授のジャン＝~~ジェロー~~
レオン ム・ジェローム (1824-1904) への対抗意識とともに、大橋に対する負けず嫌いの露呈しているのではあるまいか。ちなみに橋本雅邦がこのパリ万国博覧会に出品した、件の洋風《龍虎》も、受賞は逸している■18。

《トラ伊羅保》と《トラ・ロープ》

最後に、現代の立体作品から、世相を如実に照らし出す、ふたつの事例を取り上げよう。

前衛陶藝家として知られた八木一夫 (1918-1979) は1961年に、十二支のひとつとして《虎置物》を提案している。有名な《ザムザ氏の散歩》(1954) に用いた伊羅保釉をうまく生かして、釉薬の生地との反発や焼成による収縮を計算にいれ、虎の背中縦縞模様を浮き立たせた諸諺

ある逸品。そこには釉薬と焼成についてのたしかな技量と、遊び心ある想像力とが見事な合体の成果が見られる。とはいえ、この胴長のトラの造形的意匠そのものは、韓国の民藝や焼き物からも、抜け目なく着想を「頂いた」発案だったことを、見逃してはなるまい。

もうひとつは、岡本光博 (1968-) 発案のTorarope■19。岡本はつとに、有名ブランドの商標やロゴを流用して、《バッタもん》などを開発してきた。真正品と偽造商品との区別を錯乱させる目論見を通して、商標登録の偽善性を鋭く批判してきた岡本だが、商標のパロディーは、ともすれば商標保持者から、展示差し止めなどの制裁を被ることがしばしば発生した。そうしたなかで、通称タイガー・ロープと呼ばれる、黄色と黒の縞模様で織り上げられた、工事区域標識用の綱に、岡本は注目した。虎模様の綱を材料に、そこから逆に遡って、そのそもそもの発想源だったトラを復元・造形してみよう、という「倒錯」した企てである。

パリの日本文化会館で、このタイガー・ロープ製トラの立体造形を展示した設営現場に、居合わせたことがある。エッフェ



岡本光博 《トラ・ロープ》
2009（上），2008（下）

ル塔に通じる目抜き通りに面した展示ウインドウから、街路の方に顔を向けた「綱/虎」。散歩で鉢合わせした犬が、ロープのトラを目にして、釘付けになって立ち往生する。なるほど犬族には、この造形は巨大な猫族と映って、驚異あるいは脅威？となるのだ、と実感された。飼い犬が突如、作り物のトラの前で恐慌をきたす。それには飼い主たる人間様の

ご主人たちも、些かならず驚いていた。

そういえば、徳川將軍の飼う虎の生き餌に供されながら毅然として立ち向かい、相討ちに果てた忠犬の物語が、戸川幸夫（1912-2004）にあった。幼少時の読書の記憶だが、その短編の表題は何だったろう……。

*連載はこれにてお開きとします。

長年にわたり、ありがとうございました。